

シードブック

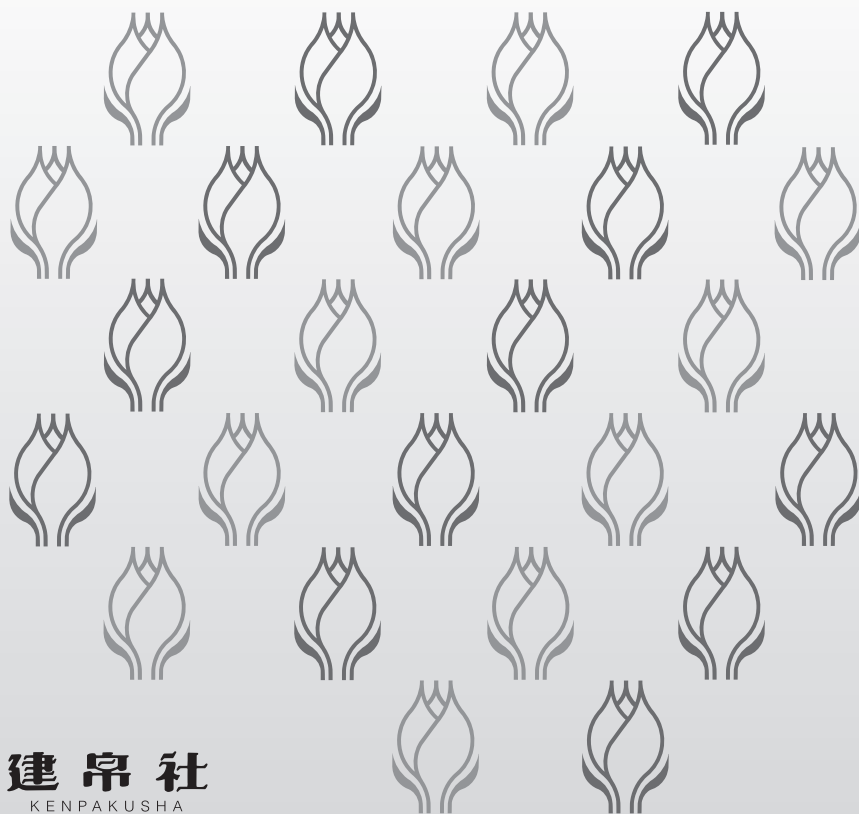
目録 保育者論



榎田二三子・大沼良子・増田時枝 編著

石井 雅・小倉常明・木村英美・小泉裕子・竹石聖子・塚田幸子

永倉みゆき・浜口順子・嶺村法子・室久智雄・矢田美樹子・渡辺佳子 共著



建帛社
KENPAKUSHA



は し が き

保育者になりたいと希望に胸をふくらませて養成校に入学した皆さんは、今どのような思いをいただいているのでしょうか。

本書は、これから保育者になろうとする人達が、保育の場で実際に働いている保育者像をイメージしやすいように、先輩保育者からのメッセージを出発点として、保育における子どもとのかかわりで大切にしていること、子ども達の豊かな生活環境をつくること、保護者や小学校・他の専門職との連携、現場で働く保育者の仕事内容、法令で定められた責務、社会の変化に対応して求められる保育者の役割や期待されることなど、具体的な記述を通して伝えようと、編者・執筆者一同、討議を重ねて編まれています。

養成校で学んだのち、保育者として子どもと生活をともにすることになる皆さんは、在学中に勉強したことを、幼稚園実習や保育所実習の場で実際の保育とつなげ、保育する心と実践力をそれなりに身につけられることでしょう。しかし実際の保育の場は多様で、いろいろな事柄が混在しています。保育をすることだけではなく、保護者への対応や支援、小学校教育や地域とのつながり、特別なニーズをもつ子どもへの援助など、保育者に求められる働きは多岐にわたります。そのときどきに、保育者は精一杯対応していきますが、その保育者の毎日の働きがどのような意味をもっているのか、いったい何がどのような理由で求められているのか、そこで尊重していくべきことは何であるのか、そして保育者に何が期待されているのか、考えなければならないことはたくさんあります。学生であるときに、このようなことについて整理し、一つ一つ丁寧に考え学んでください。

本書では、保育者として「こういう能力が必要ですよ」と直接的には書かれていません。皆さん自身が、各章の内容から、求められる心構えや知識、考え

方、方法をつかみ、自分自身を見つめ、さらに自分の課題を見いだして、自身の保育者像（保育観）を描けるようにしてほしいとの意図からなのです。それが、実践しつつ学ぶ保育者として成長していくために、もち続けたい基本的な姿勢だからです。

本書を教科書としてだけでなく、保育者になってからも折に触れて開いていただき、保育の一助となるように役立てていただけることを願っています。

三訂版にあたって

2011年に入学の学生から適用された保育士養成課程において「保育者論」が必修科目として設けられ、学習内容が示されました。これを受け、本書においても、教職課程における教師論、教職論のみならず、保育士養成課程で必修になった意味を精査し、2011年9月に改訂版を発行しました。

2015年4月には「子ども・子育て支援新制度」が本格スタートし、本書においても関連する記述を改め、改訂第2版を発行しました。

また、2017年3月、幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領が改められたのに伴い、改訂第3版を発行しました。

そして2019年度より新しい教職課程・保育士養成課程が実施されることに伴い、科目の内容も改められたため、本書においても再び改訂を行い、ここに三訂版を刊行した次第です。

本書を手がかりにして学びながら、いつの時代にも変わらず大切にすること、社会の変化に応じて求められること、そして保育者としてあるべき姿について考え、子ども達の未来につなげていってくださることを期待しています。

2019年2月

編者 榎田二三子
大沼 良子
増田 時枝



も く じ

第1章 保育者になるということ	1
1. 「育てられる人」から「育てる人」へ	1
(1) 保育者を目指したきっかけ	2
(2) 学校生活（授業、ピアノ、実習等）	2
(3) 就職について	5
(4) 新任時代から現在まで	6
(5) これから保育者を目指す人達へ	7
2. やってみよう，感じてみよう，考えてみよう.....	7
(1) 育てられる者から育てる者への視点の転換を	7
(2) ワークの流れ	8
第2章 保育の本質	16
1. 保育とは何か.....	16
(1) 幼い子どもを「いとおいしい」と思うこと	16
(2) 子どもの「生活」を基盤とすること	17
(3) 「遊び」を生活とのつながりで捉えること	20
(4) 生活と自然をつなぐこと	22
(5) 養護と教育の一体的展開	25
2. 保育者の子ども観・保育観.....	25
(1) 子ども観・保育観はつくられる	25
(2) 子どもの「一人一人」とかかわること	28
(3) 保育者の主体性と省察	29

第3章 保育実践と保育者	31
1. 幼稚園における子どもとのかかわり.....	31
(1) 担任保育者として子どもと出会うとき	31
(2) 保育者がともに遊ぶとき	35
(3) 保育者へのメッセージ	40
2. 保育所における子どもとのかかわり.....	44
(1) 担任・担当保育者として子どもと出会うとき	44
(2) 保育者がともに遊ぶとき	47
(3) 子どもとともに生活する一人の人間として	50
3. 幼保連携型認定こども園における子どもと保育者	52
 第4章 豊かな環境をつくる保育者	 54
1. 環境と保育.....	54
(1) 「環境を通しての保育」の意味	54
(2) 保育の「環境」とは何か	55
2. 子どもの生活を支える環境.....	58
(1) 安心感があること	58
(2) 親近感があること	60
(3) 自由があること	62
(4) 満足感や達成感が得られること	62
3. 環境の再構成と活動の展開・発展.....	64
(1) 経験の発現から発展・展開にいたる保育者の援助	64
(2) 子どもの知的好奇心や探究心を刺激する環境の再構成	67
4. 豊かな環境をつくるために.....	68
(1) 多角的に子どもの実態を捉えること	69
(2) 環境に対する理解を深めること	70
(3) 子どもとともに創っていくこと	71
5. 保育の展開と評価.....	72
(1) 教育課程・全体的な計画に基づく保育の展開	72
(2) 保育記録と自己評価	73
(3) 保育カンファレンスによる評価	75

第5章 保育者の協働	77
1. 求められる保護者支援.....	77
(1) 今、なぜ子育て支援が必要なのか	77
(2) 親と子がともに育つ	80
(3) さまざまな子育て支援の実施	81
2. 保護者との協働の実際——子育てのパートナーシップとして	82
(1) 子育て相談	82
(2) 情報の提供	82
(3) 親子参加型の事業	83
(4) 預かり保育	84
3. 地域に開かれた保育——子育てコミュニティーの中核として	86
(1) 園庭開放	86
(2) 未就園児の親子登園	86
(3) 一時預かりや子育て支援センター	87
(4) 地域の人の招き入れ	87
(5) 地域の行事への参加	88
(6) 教育、福祉、医療機関との連携	88
4. 専門職間の連携・協働.....	89
(1) 保育者間の連携・協働	89
(2) 保育者以外の専門職との連携・協働	89
5. 専門機関との連携・協働.....	90
6. 地域型保育事業における連携.....	92
(1) 地域型保育事業の保育者	92
(2) 地域型保育事業と保育所等との連携	92
第6章 小学校の先生と連携する保育者	94
1. 幼稚園・保育所等から小学校への段差とは.....	95
(1) なんでこうなるの?——小学校でのとまどい	95
(2) 生かされた経験・生かされなかった経験——段差を越える力とは	98
(3) 「接続期」という捉え方——段差をどう生かすか	99
2. 子ども達の交流活動.....	100
(1) 一人ひとりが見える交流を	100

(2) 交流から何が生まれるか	101
(3) 連携を進める交流の視点とは	102
3. 大人達の連携	102
(1) 連携のさまざまな形	102
(2) 見守る大人達のつながり	104
(3) 接続モデルカリキュラム	105
第7章 学び、成長する保育者	106
1. 保育者になるための学び	106
(1) 学生時代の学びとその意義——豊かな人間性を育むチャンス	106
(2) 保育者に必要な資質・技能・知識を獲得する時期	107
(3) 「保育者としての学び」の実践	111
2. 専門性・資質向上の取り組み	112
(1) 制度のなかでの専門性向上のための学び	113
(2) 保育者としての専門性向上——保育実践のなかでの学び	115
(3) 保育者集団の質の向上のための取り組み	116
(4) 組織とリーダーシップ	118
3. 学び続ける保育者	118
第8章 保育者のキャリア形成と生涯発達	120
1. 幼稚園における保育者	120
(1) 保育者の1日	121
(2) 保育者の1か月	125
(3) 1年間を見通しての仕事	129
(4) 幼稚園における保育者のライフコース	131
2. 保育所における保育者	132
(1) 保育者の1日	133
(2) 保育者の1か月	136
(3) 1年間を見通しての仕事	139
(4) 保育所における保育者のライフコース	141

- 3. 幼保連携型認定こども園における保育者…………… 142
 - (1) 保育者の1日と職員間の連携について 142
 - (2) 今年度の行事・園務分掌 143 (3) 勤務の形態 143
- 4. 児童福祉施設における保育者…………… 144
 - (1) 児童福祉施設について 144 (2) 乳 児 院 145
 - (3) 児童養護施設 147 (4) 障害児入所施設 150
 - (5) その他の児童福祉施設での保育士の役割 151

第9章 法令で定められた保育者の責務と制度的位置づけ…………… 153

- 1. 法令と保育者…………… 153
- 2. 教育・保育の基本に関する法令…………… 154
 - (1) 児童の権利に関する条約 154 (2) 教育基本法 154
- 3. 免許状・資格に関する法令…………… 156
 - (1) 教育職員免許法(幼稚園教諭) 156 (2) 児童福祉法(保育士) 157
 - (3) 認定こども園に関する法令 158
- 4. 幼稚園教諭・保育士・保育教諭の職責に関する法令…………… 159
 - (1) 学校教育法 159 (2) 児童福祉法 159
 - (3) 就学前の子どもに関する教育、保育等の総合的な提供の推進に関する法律
(2017(平成29)年改正「新認定こども園法」) 159
 - (4) 地方公務員法(服務と身分保障、分限と懲戒) 159
 - (5) 教育公務員特例法(研修義務、身分保障) 160
- 5. 保健・安全に関する法令と保育者…………… 161
 - (1) 学校保健安全法 161
 - (2) 児童福祉施設の設備及び運営に関する基準・保育所保育指針 161
 - (3) 児童虐待の防止等に関する法律 162
- 6. 保育事故と保育者の法的責任に関する法令…………… 162
 - (1) 刑法と業務上過失致死罪 162

(2) 民法と保育者の安全注意義務 163

(3) 国家賠償法 165

第10章 歴史から学ぶ保育者のあり方 …………… 167

1. 保育者の誕生期…………… 167

(1) 中村正直と亜米利加婦人教授所の3人の宣教師 167

(2) 東京女子師範学校附属幼稚園の関信三と3人の保育者 167

(3) 「保育4項目」時代の保育者 168

(4) 明治期後半にみる専門職としての保育者 168

2. 大正、昭和初期にみる幼稚園教育の普及と幼稚園保姆の地位…………… 169

(1) アメリカの児童研究と自由保育の潮流にみる保育者 169

(2) 倉橋惣三の思想にみる保育者 169 (3) 戦時下の保育者 170

3. 戦後の保育制度と保育者…………… 170

(1) 戦後の教育制度と保育者のあり方（戦後～昭和30年頃まで） 170

(2) 「保育要領」と幼児の生活を重視した保育者 171

4. 昭和30年代～昭和後期にみる専門家としての保育者像…………… 171

(1) 幼稚園教諭免許制度の動向——大学での保育者養成や現職教育 172

(2) 「幼稚園教育要領（1956（昭和31）年）」刊行と保育者 172

(3) 保母養成の動向——「幼稚園と保育所との関係について」 173

(4) 「幼稚園教育要領」（1964（昭和39）年告示）と「保育所保育指針」（1965（昭和40）年通知）と保育者 173

5. 子どもを取り巻く環境の変化と保育者に期待される役割…………… 174

(1) 平成初期の動向と保育者の専門性 174

(2) 平成10年代（1998～2007年）の保育者の専門性 175

(3) 平成20年代（2008～2017年）の保育者の専門性 177

(4) 平成30年代以降の保育者に期待されること 178

第11章 子育て環境と保育者の役割の変化	180
1. 少子化と保育	180
(1) 少子化の進行	180
(2) 幼稚園と保育所の変化	181
(3) 子ども・子育て支援新制度の始まりと保育教諭	182
2. 地域の子育て家庭と保育	183
(1) 家庭や地域の養育力	183
(2) 保育・教育施設に求められる役割	184
3. 個別のニーズと保育	186
(1) 福祉, 人権, 教育への認識の変化	186
(2) 個別のニーズへの対応	186
4. 多様化する保育と保護者支援	187
(1) 多様化する保育	187
(2) 多様な保育から選択する	188
(3) 子どもの最善の利益と保護者支援	188
5. 多様なニーズへ対応する保育者への期待	189
(1) 求められる専門性と研鑽	189
(2) 保育者としての倫理	190
さくいん	193



第1章

保育者になるということ

1. 「育てられる人」から「育てる人」へ

保育者と聞いて私達が思い浮かべるのは、幼稚園や保育所の先生などであろう。正式には幼稚園教諭、保育士、保育教諭などと呼ばれる。ここでは、そうした名称の違いやかかわる子どもの年齢の違いなどをふまえた上で、ともに「子どもの育ちに重要な役割を担う」という意味で「保育者」と呼びたい。

「保育者」とは「就学前の子ども達の面倒を見ながら、安全に楽しく遊ばせてくれる人」という一面もあるが、それだけでは子ども達と遊んでくれる「近所のやさしいお姉さん、お兄さん」と変わりがない。やはりここでは「子どもの発達に精通し、よりよく育つように援助できるプロフェッショナル」と考えたい。しかし、資格を取ればすぐになれるわけではない。実践の場においていろいろな勉強や体験を通して徐々に「保育者」になっていくのである。

本節ではまず、保育者として活躍している先輩達へのインタビューをもとに、彼等がどのように学び、考え、育ってきたのか、そしてこれから保育者になる皆さんにどのようなメッセージを抱いているのかを紹介したい。

■インタビュー回答者プロフィール

- A 女：私立幼稚園勤務，3年目，現在年中組担任
- B 女：私立幼稚園勤務，3年目，現在年少組担任
- C 女：私立保育所勤務，5年目，現在5歳児担当
- D 女：公立保育所勤務，7年目，現在0歳児担当
- A 男：私立保育所勤務，3年目，現在3歳児担当
- B 男：公立幼稚園勤務，5年目，現在年中組担任
- C 男：私立幼稚園勤務，7年目，現在副園長

(1) 保育者を目指したきっかけ

- A女：はじめは保育者になろうとは思っていませんでした。高校卒業時に進路指導の先生に相談したところ、自分の特技（ピアノ、歌、体育、工作）が生かせる職業ということで決めました。
- B女：私は保育所出身ですが、小さい頃から幼稚園の先生になるのが夢でした。その頃から幼稚園と保育所の先生の違いを感じていて、夏休みがあってクラス担任ができるので「絶対に幼稚園の先生」と思っていました。
- D女：短大を卒業したのですが、就職が見つからず、やはり資格が必要だと思ったからです。
- A男：中学のときの職業体験で保育所に行き、子ども達と接するうちにこの仕事をやろうと思うようになりました。
- C男：私は実家が幼稚園を経営しており、将来園長になるために資格が必要だったからです。

ポイント：保育者を目指したきっかけは、大きく2つに分かれる。1つは「小さい頃からの夢だった」、「子どもが好きで子どもとかかわる仕事をしたかった」というもので、もう1つは「特技や趣味が生かせる」、「将来役に立つ、あるいは必要だから」というものである。いずれにしてもしっかりした目的意識をもって取り組むことが、よりよい保育者になるために大切である。

(2) 学校生活（授業、ピアノ、実習等）

1) 授 業

○授業について

- A女：あまり休まずに授業を受けました。私は体を動かすことが好きなので、そうした科目はおもしろかったです。講義科目は…、楽しいものもあり、わからないものもあり、といったところです。
- C女：実技科目は、実習でも働き出してからもすぐに役に立ちますので、いろいろなことを学んでおくといいと思います。宿題が多くて、正直なところあまり真面目ではなかったのですが、今思うともっとたくさんやっておけばよかったと後悔しています。

○実際に働くなかで思うこと

B 女：今、よく開く教科書は子どもの成長過程や病気、クラス運営や環境設定のところです。基礎的・知識的なものは、働き出すと勉強している余裕がありません。技術的なものは、毎日の保育で自然と身につきます。ただ、保育に使う小物類は、学生時代にたくさん作っておいたほうがよいと思います。

B 男：授業内容はあまり覚えていませんが、「どこかで聞いたぞ」ということが大切。困ったとき、教科書やノートを見直すとけっこう出ていて助かっています。働き出してから基礎や知識の重要性に気づいて、もっとやっておけばよかったと思っています。

ポイント：授業は、出席管理が厳しいため、休まず真面目に受けたようである。実技科目は楽しく、実習時や職場で役立つ、という意見が目立つ。ただ、製作には時間がかかり、宿題も多かったのは大変だったようである。一方、講義科目は実際に働き出してから大切さを痛感するようである。先生の話をよく聞き、教科書やノートをしっかり取ることが大切である。

いずれも、実技に使う小物や、基礎や知識などの勉強など、時間がかかることは学生時代にもっとたくさんやっておけばよかった、と思っている。

2) ピアノ

○ピアノ授業について

B 男：ピアノはやったことがなかったので本当に苦勞しました。でも、毎日練習したのでけっこう弾けるようになりました。

C 男：私は、追試、追試でなんとか合格したレベルですが、それでもかなり練習しました。試験前はほとんど徹夜でした。

○実際に働くなかで思うこと

A 女：私の勤める幼稚園は音楽教育に熱心なのでピアノは必須です。小さい頃から習っていて得意なので、とても楽しいです。

C 女：私は保育所ですが、キーボードはけっこう使います。他の保育所では全く使わない所もあるようですが、弾けたほうがよいと思います。

C 男：就職試験でピアノが課されました。難しい曲を弾けるようになる必要はありませんが、普段使う曲は、弾けないと困ります。ピアノは、学生時代に「どれだけ真剣に保育者を目指したか」の1つの目安だと考えています。

ポイント：ピアノは、小さい頃から習っていた人は別として、苦勞する（特に男性は）科目である。ピアノの利用度は、幼稚園では高く、保育所では比較的低いようであるが、弾けるにこしたことはない。そして、ピアノの上達には毎日の練習が欠かせないと全員が答えている。

3) 実 習

○実習について

A 男：子ども達は男の先生が大好き。だから実習はやりやすかったですね。日誌とか、責任実習の指導案作成は大変だったけど、今考えると楽しい思い出しかでてこないです。

C 女：夜遅くまで日誌を書いたり、保育の準備をしたり。朝は早いし、夏は子ども達と一緒に泥だらけになったりして、今思うとよくやったなと思います。

○実習生へのアドバイス

A 女：私は実習のときにいろいろやらせていただき、勉強にもなり、自信にもなりました。ですから、私のクラスの実習生にはできるだけたくさんのをやってもらっています。もちろん、簡単のところからですが。せっかく実習に来たのだから、保育について、いろいろな経験をしてほしいと思います。

C 女：保育所はいろいろな年齢の子どもがいるので、年齢ごとの発達の様子などはある程度勉強してきてください。やはり、準備は大切だと思います。

D 女：実習ではいろいろな年齢の子どもを次々に経験しなければならないので、大変なのはわかりますが、わからないから見ているではなく、聞きなり調べるなりして、自分から積極的に取り組んでください。

ポイント：実習は社会人になるための第一歩である。実習生といえども子ども達にとっては先生であり、それまでの「育てられる人」が、初めて「育てる人」の立場を経験する場でもある。実習は、大変だったが後から考えると楽しかった、という意見が圧倒的である。実習園の指導方針にもよるが、せっかくの実習なのだから、保育に関するいろいろなことを経験して欲しいと思っているようだ。その一方で、状況によっては任せられないという意見も多い。いずれにしても、準備をしっかりと積極的に取り組むことが大切なことである。

(3) 就職について

○現在の就職をどのようにして決めたか

- A 女：私は、幼稚園が希望でした。就職の先生の紹介で就職しました。第1希望ではなかったのですが、けっこう楽しく、この園でよかったと思っています。
- A 男：私は、故郷に帰りたと思っていました。田舎で私立保育所が少なく、今の所を第1候補に考えていました。元々中学校の職業体験でその保育所に行ったことが、保育士になるきっかけでした。その後も実習や休み中のボランティアをさせていただきました。これらの活動が評価されそのまま就職しました。
- D 女：私は、短大を卒業後この道に進みました。年齢が少し高かったのと、一生働きたいと思い、公立保育所を希望しました。何か所か受けて受かったのが今の保育所です。

○就職に対するアドバイス

- A 女：就職は希望通りにいかないかもしれませんが、あきらめないこと。どこの園に行っても一生懸命やるのが大事だと思います。
- B 女：自分の希望をしっかりとって、就職の先生とよく相談をすること。そうすれば希望の園が見つかるはずです。
- D 女：はじめから目標をもってしっかり勉強しておくこと。きっと役に立ちます。